

# 釜ヶ崎

1981年冬



キリスト教釜ヶ崎越冬委員会

# 少しは

「あなたにおいらの痛みがわか  
ってたまるか」  
目に見えない痛み、また肉体で  
は感じない痛み。そのような痛み  
を、人は誰でも背負いつつ生きて  
いるのではなからうか。  
しかしここ釜ヶ崎には、何重も  
の痛みを背負い、それと闘い、の  
りこえようと努力している人が非  
常に多い。先ほどのことは、未

熟な私に言ってくれた労働者のこ  
とばである。  
そのことばが私の胸で、疼きは  
じめた。痛みを理解しようとする  
してもなかなかわからず、共感で  
きない。そしてますます、労働者  
が言ってくれたことばの意味の深  
さと重さだけが、私の胸を疼かせ  
るだけである。  
私たちは、今の社会のしくみの

中で、どれだけ多くの人たちの犠  
牲の上に腰をかけて、安楽に生き  
ているのだろうか。そのことへの  
「痛み」をもう少しは感じる者にな  
りたい。  
友人の便りにこんな文章がかか  
れてあった。「平和の原点は、人  
間の痛みがわかる心を持つこと  
です。」(高橋昭博)

(入佐明美)

## もくじ

〈巻頭言〉入佐明美 1

第12回釜ヶ崎越冬闘争支援を終えて 2  
越冬日録(1981-1982) 4

### 釜ヶ崎労働者の闘い

第12回釜ヶ崎越冬闘争の目標と課題 10  
「釜ヶ崎炊き出しの会」等の取りくみから 13

### 大阪市の「越年対策」批判

要望書も受け取り拒否—西成保健所 16  
保護申請の8分の2は却下—市更相 17  
シノギ退治とポスター—西成警察 18  
機動隊と有刺鉄線に囲まれて—臨泊所 19

福寿園の火事 18

午前1時の釜ヶ崎 20

### 第7回越冬セミナー

セミナー日記 24

参加者の感想  
堀剛 宮本潤子 山路咲子 横山潤 26-27

結核と労働とアルコール 28

いよいよ! E. ストローム 32

本の紹介●『神様が笑った』 33

映画『生きる』●渡辺孝明監督の弁 34

『生きる』をみて 村田由夫 35

### 釜ヶ崎近況1982年6月

いかに仕事が減ってきているか 36

でたらめな医療機関 39

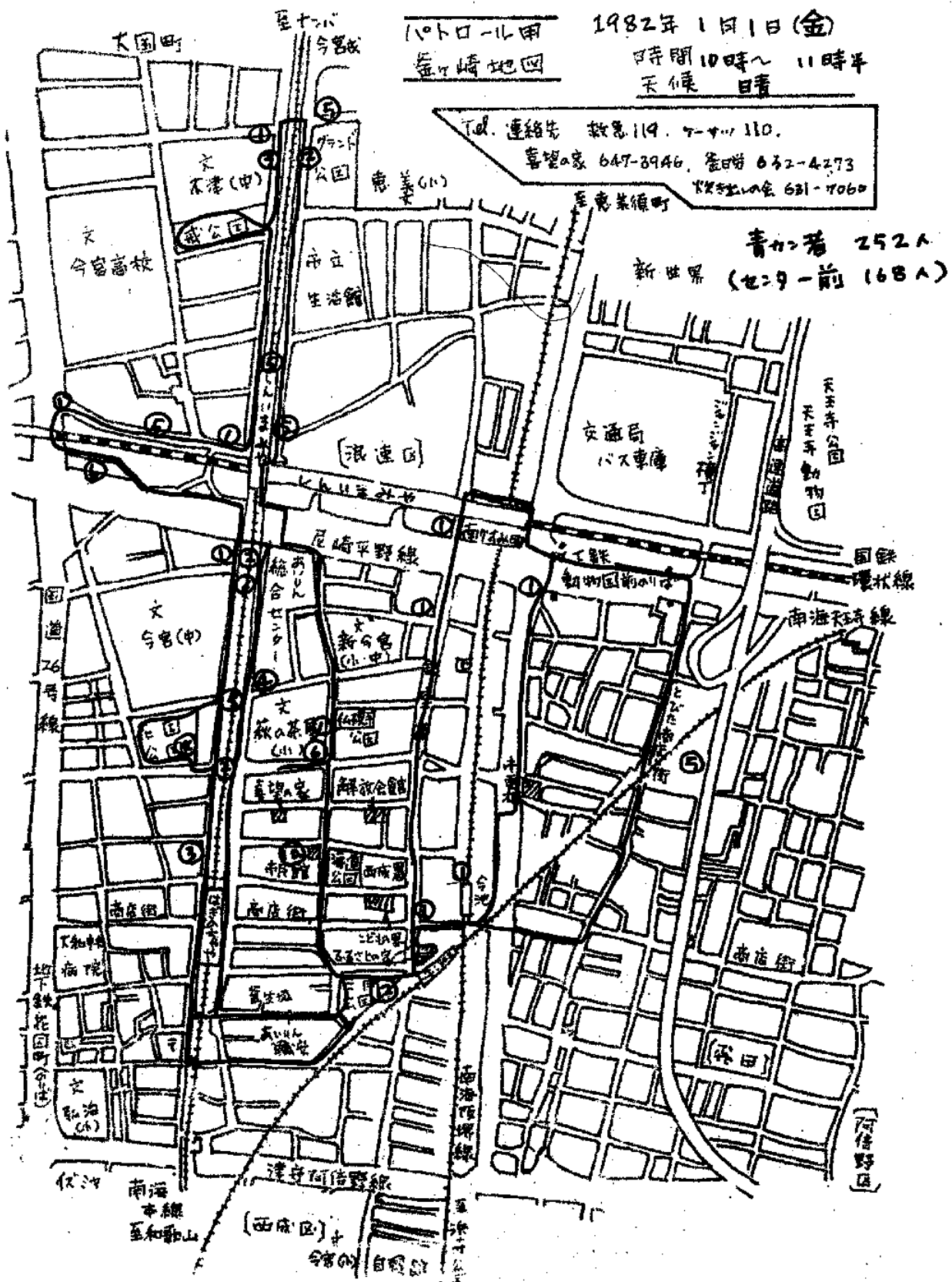
釜ヶ崎の越冬に700万円のカンパを 40

Iさんの手紙●81冬中間報告 42

編集後記 44

カット●創造広場提供/マンガ●「日刊えっとう」

誌提供/表紙●武内司郎



# 第12回釜ヶ崎越冬闘争支援を終えて

はじめに

第12回釜ヶ崎越冬闘争は一九八一年十二月一日から一九八二年二月二十八日まで行われた。キリスト教のグループが釜ヶ崎の越冬闘争「支援」をはじめ、今年で八回目。釜ヶ崎協友会と関西キリスト教都市産業問題協議会で「キリスト教釜ヶ崎越冬委員会」を組織し、釜ヶ崎の医療・特に結核というテーマをもちながら、いくつかに分かれて行われている労働者のグループの諸活動を支援してきた。越冬支援を終えた今、いくつかの感想をメモしておきたい。

## 釜ヶ崎の状況

釜ヶ崎の求人状況は、オイルショックの一九七四年暮に最低を記録。その後、政府の公共投資によって、土木・建設部門を中心として徐々に回復し、一九七九年十月の現金求人は、一九六三年労働センター開設以来の最高を記録した。しかし、一九八〇年から再び下降傾向を示し、一九八一年の求人状況はオイルショック以来の下降線を辿った。このことは、労働者が売手市場に回わされることを意味

する。すなわち、労働者は手配師によって選別（顔づけ）、分断され、高齢・病弱・障害者などの最困窮者は就労から切り捨てられる。しかも、現金求人の減少によって労働者の最少限度の就労選択権すら奪われ、いつでも使用者の自由になる飯場にプールされる。

(1)労働争議運動 悪徳手配師、飯場における条件違反、賃金未払いなどに対抗し、釜ヶ崎日雇労働組合は「争議団」を組織して糾弾行動を起こしてきた。特に、東京山谷、横浜寺町、名古屋笹島のいわゆる全国の寄せ場においても釜ヶ崎と同質の問題があり、寄せ場運動の連帯を生み出した。争議行動は越冬闘争へも継続されていった。

(2)生活保護獲得運動 就労の機会から切り捨てられた最困窮者は、「炊き出しの会」などによる炊き出しに長蛇の列をなした。釜ヶ崎地域合同労働組合などは、大阪市に対して生活保護の適用を求める行動を起こし、七月までに三百八十人が生活保護を獲得した。この行動によって、炊き出しに並ぶ人数は一時減少したが、越冬闘争時には再び増加の一途を辿った。

(3)あいりんクリーン作戦 西成警察を中心とする行政は、

町内会などを巻き込んで「あいりんクリーン作戦」を展開した。街をきれいにするという一見善良な運動は、苦しさにあえぐ釜ヶ崎の矛盾をみごとに顕微鏡する作用をした。

(4)医療連絡会 キリスト教グループは、越冬後「医療連絡会」を組織し、二人の専従者を中心に一人の結核患者の完治を求める活動をした。病院訪問、医療相談、関係機関との連絡での投薬など具体的な関わりの中で結核患者の完治をみた。越冬支援に関わったボランティアの連絡会も重ねたが、これは具体的行動までには至らなかった。

## 釜ヶ崎の叫び

こうした状況の中で第12回釜ヶ崎越冬闘争は十二月一日から始まった。まず、炊き出しの会による炊き出しが、西成警察署の裏にある秋之茶屋中公園で朝、昼、夜の三回行われた。越冬闘争実行委員会の夜間パトロールは十二月二十五日午後十時から一九八二年一月十五日まで行われ、キリスト教越冬委員会もこれに参加したが、一月十六日から二月二十八日までキリスト教越冬委員会独自で深夜一時から行った。全体としての一日のスケジュールは次のようであった。

AM五：〇〇 布団あげ

六：〇〇 情宣ビラまき

六：三〇 医療、労働相談

九：〇〇 朝の炊き出し

IM一：〇〇 昼の炊き出し  
七：〇〇 夜の炊き出し  
八：〇〇 布団敷き  
一〇：〇〇 夜間パトロール、夜警

この間に診察依頼券の発行、病院訪問、争議行動、もちつき大会、越冬セミナーなどの日常活動が繰り返された。毎年のように行政への要求書を環境保健局と西成保健所へ提出したが、今越冬では受け取ってもらえなかった。不況の中でさびしい冬の釜ヶ崎。抑圧され、行旅病死していく釜ヶ崎の仲間の実態を少しでも明らかにしていかなければならない。

## いくつかの課題

越冬支援を終えて、キリスト教グループは「キリスト教釜ヶ崎医療連絡会」をつくり、再び一人の結核患者の完治を求める活動を続けている。いくつかの課題がある。

(1)活動グループとの協力 釜ヶ崎でいくつかに分かれて活動しているグループが、結核問題に関して協力できる体制をつくる。

(2)ボランティアとの連絡 越冬支援に参加してボランティアと連絡をとり、年間を通しての釜ヶ崎がどうなっているかを考え合うために「通信」を発行したり講演会を行う。

(3)「旅路の里」の運営 結核患者のアフターケアの場としての「旅路の里」の運営を具体化する。

# 越冬日録

一九八一〜一九八二



一九八二年一月二十日 厳しい寒波が襲った早朝、社会医療センター前のバスの陰で二名の労働者が死んでいるのが発見された。(日録より)

一九八一年

11月24日

27日

12月1日

カンパ要請ビラの発送を行う。今年の日目標額は八百万円。

釜ヶ崎地域合同労組、炊き出しの会、結核患者の会、釜ヶ崎労働者生協が今日より二月末まで第12回越冬闘争を闘かう。

炊き出しは一日三食を支給し、朝の炊き出しの後、医療センターへ行き診断してもらい、昼の炊き出しの後、市更相へ行き、入院・入寮の受け付けのため交渉する。市更相で却下された人に対しては、もう一度、挑戦するように力づける。

7日

付添いの人は市更相の中には入れないので入院、あるいは入寮が決まった場合、組合の方に連絡するよう葉書きを労働者一人一人に渡してある。市更相は、労働者が組合との関係を断つため、その葉書きを取りあげているそうである。保健所・環保局へ要望書を持って行く。

(要望書内容と西成保健所の対応の様子は、十七ページの関係記事参照)

保健所の態度は高圧的であり、要望書すら受け取らない。環保局は、要望書に目を通し、前向きに対応することだったが、結局話し合いには応じなかった。

保健所・環保局へは毎年、要望書を持って行

12月15日

っている。昨年は組合、被爆者の会と共に団交を行ったが、今年はそれもできなかった。それにしても、もう少し、誠実な対応ができないものか、と思う。

今年のキリスト教越冬委員会の代表重野氏が、「近畿の顔」(NHK)に出演。今越冬の取り組みについて、布団・衣類等のカンパ、炊き出しへのカンパを訴えた。また、行政が民間のボランティアと協力できないか、と訴えた。その後、数十人の方々より、カンパ送先の問い合わせ、ボランティアとして働きたい、という電話があった。

24日

第12回越冬闘争実行委員会の決起集会在、夕方に三角公園で開かれた。先ず越冬実から、秋に結成した全国寄せ場交流会(山谷、寿、笹島、釜ヶ崎)の団結のもと、医療と労働相談を軸に闘うというあいさつの後、各班が決意表明を行った。

次に支援団体のあいさつがあり、この越冬を最後まで闘い抜くという力強い連帯の決意が述べられた。

25日

最後に、労働者、支援の仲間約百三十名と共に七三年暮の第四回越冬闘争の記録映画を見、力強いシュプレヒコールで集会を終えた。ふるさとの家において協友会主催クリスマス

12月25日

会が開かれた。  
その後、喜望の家喫茶室において、夜間学校、創造広場、喫茶室合同のクリスマス会を行った。約三十名が参加し、くつろいだひとときをすごした。

会の後、夜十時から一日目の夜間医療パトロールに参加。  
第12回釜ヶ崎越冬闘争実行委員会は、「熱い団結で冬地獄を撃て」をスローガンに、今日より一月十五日まで越冬闘争に入った。昨日は決起集会を行い、今年は、医療と労働相談を軸に闘うという決意表明を行った。

一日のスケジュールは、朝五時に布団をあげ、六時半から医療、労働相談を受けつけ。九時から医療センターで診察後市更相へ行く。夜は八時に医療センター前に布団を敷き、十時から夜間医療パトロールを行い、シノギ防止のため一晩中、警備を行う。また、一月十五日まで連日「日刊えっとう」を発行した。今年の「日刊えっとう」は、マンガ入りでなかなか好評だった。キリスト教釜ヶ崎越冬委員会は、今年も結核の問題を中心に取り組むことを決め、一月十五日までは、越冬実を支援するというかたちで、毎曜日責任者を決め、パトロールを行った。年末・年始にかけて、学生を中心にボランティア

12月30日

臨時の宿泊所（臨泊）が一月十日頃まで設けられる。

両日は、白手帳をもっている人、老婦、病弱者を基準に受け付けを行い、約六百人が入所したと言われている。

先頃、大阪市民生局が毎年南港に開設している臨時無料宿泊所を見に行った仲間の話によると、今年は昨年より多少近くなって、かもめ大橋をわたって少し行った所にあるそうだ。

プレハブは十六棟で、すでに民生局の職員とガードマンが常駐し、まわりには立ち入り禁止の立札と住吉警察の駐車禁止の立札がある。また、臨泊の回りに有刺鉄線を張りめぐらせた様子は、さながら「強制収容所」を想い起こさせる。

臨泊があるからといって、青カン者がかなり減少するかというところではない。何のための臨泊かと思われる。（青カン者二三〇人）  
炊き出しの会等が主催し、解放会館前でもちつき大会が開かれた。

一九八二年  
1月1日  
3日

セミナー

越冬委員会が主催し、第七回越冬セミナーが開かれた。

テーマは、医療一特に結核とし参加者は十四名。参加者の感想を読んでいると、大変なことを

12月28日

が集まり、支援してくれたのはありがたかった。あいらんクレーン推進協議会が、午前中、三角公園で労働者の不評をなんとかとばらおうと、もちつき大会を行った。

あにはからんや、一人の労働者曰く、「ポリ公ばかりでどうにかなりませんか」取ってつけたようなこのような行事が、日頃抑圧されている労働者に率直に受け入れられるはずがない。パトロール前に救急車により入院した人が二十分後に死亡した。

このように、釜ヶ崎では年間約三百人という膨大な人数が行路病死させられていくという現実がある。今日も、路上であるいは病院で、私たちには隠されたまま、亡くなっていて人々のことを思うと無力感とやりきれなさを感ずる。一人の生命があまりにも軽々しく扱われている。

また、一九八二年一月二十日、厳しい寒波が襲った朝早く、センター前に置いてあったバスの陰で二人が亡くなっていた。一月三十日には、西成区山王二丁目の路上で、六十歳の労働者、七時頃に浪速区日本橋五丁目の路上で、ふとんにくるまった六十二歳の労働者が凍死していたのが発見された。

29日

大阪市の越冬対策として、南港、自強館等に

1月4日

知ってしまった、という重さと、今後、自分自身の生き方と関連づけて、釜ヶ崎の問題を担っていきたい、という思いがひしひしと感じられる。たった三日間という期間だが、社会の矛盾に對し眼を開かされる思いを各々がもっている。その点、セミナーというのは、大きい意味をもつであろう。

参加者の一人は、「今回のようなセミナーを釜ヶ崎で行う事は是非を問えば、結果的物見遊山を招くという陥穽を感じる」と批判している。そのことを考えると、参加した一人一人の今後の生き方を問われているのであると思われる。また、労働者の団体とキリスト教とのギャップを感じたという感想もあり、今後のキリスト教の働きの課題だという気がする。

7日

仕事始め、しかし朝七時のようすでは、現金仕事のバスが八台だけしかなく、それもケタオチばかりとのこと。四日分の認定（一万六千四百円）が支給された。

越冬実が名古屋の暴力業者・八起建設の元請、ユニチカ（現場・京都府美山町）と大衆団交を行った。

八起建設は名古屋と名乗っていた七〇年頃から度々賃金未払いを繰り返して、八〇年六月には残業代を請求した仲間にスコップを振り上げたり、車で引き殺そうとしたりして来た。Fさんの場合は、賃金未払いで仲間三人と金を取りに行ったところ、けとばされ、スコップ

1月8日

を持って追いかけてきた。ちりぢりになって逃げたところ、社長は車で追いかけて、逃げ遅れた仲間をつかまえて、飯場の食堂で「殺してやる」と日本刀でおどした。この事を知った労働者は、笹日労働者を中心に山谷、寿の仲間とともに糾弾を行った。そこで親父は謝罪し、未払い賃金を払う事を確約したが、金を払うどころか、軟禁状態にし約束をホゴにした。この日積雪の中をバス「勝利号」で現場まで行き団交の結果、元請の責任において、事実調査をし、まちがいなければ八起建設を切ることを約束した。

越冬実が主催し、越冬中間報告集会が市民館で開かれた。百三十名の仲間が結集した。

まず、医療班、争議班から今までの闘いの報告と、今後も闘おうと呼びかけがなされた。

その後、ボリビア映画の「革命」、「ここから出ていけ」が上映された。遠く南米の地で帝国主義と闘っている農民の力強い闘いの姿が写し出された。

本日より二月末まで、キリスト教越冬委が中心となり、深夜一時から一時間半程パトロールを行った。このことは、昨年の総括集会で次のような提起がなされたことによる。

昨年はいよいよパトロールを終えた。しかし、二月末になって厳しい寒波が到来し、

1月21日

「希望の家」の近くで凍死者がいたのである。パトロールを続けていたら、もしかしたらこの人は凍死しなくてすんだかもしれない。二月末まで続けるべきだったのではないか。

この提起により、パトロールを行うのなら、ドヤが閉った後、一番冷え込む時に行うのがよい、ということによって深夜一時から、ということが決まったのである。

最後まで続けられるかどうか、これがまず心配だった。ところが支援者は、十六日以降の方が多かったのである。一月中は、越冬実の支援もあり、力強かった。本日の青カン者数は八十三名。(南回りのみ)

大新土木ビルの裏通りで、おそらく酒を飲んで道路で寝ていた労働者を、トラックが引き逃げした事件がおこった。

朝九時半頃、釜日労働書記長が不当に逮捕された。十二月二十五日に入院したい労働者と一緒に市更相に行ったところ、付添人は中に入れないという係長と押し合いになり、持っていたファイルで係長に傷を負わせたというデッチあみになった。

26日

2月1日

越冬実主催、越冬総括集会が市民館で行われた。今越冬において闘ってきた八起建設、藤原靖組に対する闘争、関西新空港粉砕・ボーリング調査阻止集会のスライドを上映した。

その後、各班の総括の報告(一〇ページ参照)の後、デモを行った。

7日

朝四時頃、医療センター前のドヤ「福寿園」火災、重軽傷者六名。  
ドヤの違法建築の恐ろしさがまたも明白になった。日本福音ルーテル天王寺教会において、越冬委主催、越冬支援中間報告集会が開かれた。参加者は約八十名。内容は、まず始めに横浜のドヤ街寿町の映画「生きる」を上映した。これは、日雇労働者が港灣で働く一日を追い、寿町で生きている数人が自らの足跡を語るといった労働者のありのままの姿を描いた映画。

その後、越冬実からは、老人、病弱者の軽作業場をつくる必要性があるという提議がなされ、炊き出しの会からは、自らの場で釜ヶ崎の問題と取り組んで欲しいという要望が語られた。割と若い人の参加が多く、この集会を通し、今後問題も共有してほしいと思った。

8日

カンパ要請、中間報告ビデオ送付開始。  
主に東京以南、カトリック、プロテスタントの教会、支援者に約四千通を配布する。

28日

今日で越冬終了。  
炊き出しも三月以降、一日二食になる。しかし、越冬が終っても釜ヶ崎の状況は変わ

1月27日

げである。二十九日拘留却下。  
越冬実主催、越冬総括集会が市民館で行われた。今越冬において闘ってきた八起建設、藤原靖組に対する闘争、関西新空港粉砕・ボーリング調査阻止集会のスライドを上映した。

その後、各班の総括の報告(一〇ページ参照)の後、デモを行った。

3月6日

らない。冬に問題が緊迫するということはある。今(五月と六月)は、青カンをして凍死する心配は少ない、ということでも少し活気はあるが、仕事がない、という状況は冬と変わりない。  
炊き出しの数は五百と越冬期間を上回る。年間を通しての取り組みの必要性を痛感させられる。

越冬支援総括集会をふるさとの家で行った。  
シスターの手づくりのからあげ、おにぎり、ストロームさんのケーキに舌づつみを打った後、九時半頃まで、主にパトロールについて話し合いがなされた。今回は、あまり外に呼びかけず、三十人程で、活発な討議がなされた。

一月十五日以降のパトロールについては、必要な人に「希望の家」の地図を渡し、翌日、入佐さんがケアするというかたちでパトロールで出会った一人一人との関わりが深められた。この点は、来年も続けてはどうか、ということになった。

また、パトロールで出会う労働者と、回る側としての「わたし」との関係が問題になり、「青カンしている人はこうだ」と決めつけてしまふのは問題がある、パトロール自体、限界があることを認めつつ、その中でお互いに変わっていく、ということを考えていきたいという、参加者からの率直な意見があった。

1月8日

を持って追いかけてきた。ちりちりになって逃げたところ、社長は車で追いかけて、逃げ遅れた仲間をつかまえて、飯場の食堂で「殺してやる」と日本刀でおどした。この事を知った労働者は、笹日労の労働者を中心に山谷、寿の仲間とともに糾弾を行った。そこで親父は謝罪し、未払い賃金を払う事を確約したが、金を払うどころか、軟禁状態にし約束をホゴにした。この日積雪の中をバス「勝利号」で現場まで行き団交の結果、元請の責任において、事実調査をし、まちがいなければ八起建設を切ることを約束した。

越冬実が主催し、越冬中間報告集会在市民館で開かれた。百三十名の仲間が結集した。まず、医療班、争議班から今までの闘いの報告と、今後も闘おうと呼びかけがなされた。その後、ポリビア映画の「革命」、「ここから出ていけ」が上映された。遠く南米の地で帝国主義と闘っている農民の力強い闘いの姿が写し出された。

本日より二月末まで、キリスト教越冬委が中心となり、深夜一時から一時半程パトロールを行った。このことは、昨年の総括集会で次のような提起がなされたことによる。

昨年一月いっばいでパトロールを終えた。しかし、二月末になって厳しい寒波が到来し、

1月21日

「希望の家」の近くで凍死者がいたのである。パトロールを続けていたら、もしかしたらこの人は凍死しなくてすんだかもしれない。二月末まで続けるべきだったのではないか。

この提起により、パトロールを行うのなら、ドヤが閉った後、一番冷え込む時に行うのがよい、ということ深夜一時から、ということが決まったのである。

最後まで続けられるかどうか、これがまず心配だった。ところが支援者は、十六日以降の方が多かったのである。一月中は、越冬実の支援もあり、力強かった。本日の青カン者数は八十三名。(南回りのみ)

大新土木ビルの裏通りで、おそらく酒を飲んで道路で寝ていた労働者を、トラックが引き逃げした事件がおこった。

朝九時半頃、釜日労深田書記長が不当に逮捕された。十二月二十五日入院した労働者と一緒に市更相に行ったところ、付添人は中に入れないという係長と押し合いになり、持っていたファイルで係長に傷を負わせたというデッチア

26日

朝九時半頃、釜日労深田書記長が不当に逮捕された。十二月二十五日入院した労働者と一緒に市更相に行ったところ、付添人は中に入れないという係長と押し合いになり、持っていたファイルで係長に傷を負わせたというデッチア

1月27日

越冬実主催、越冬総括集会在市民館で行われた。今越冬において闘ってきた八起建設、藤原増組に対する闘争、関西新空港粉砕・ボーリング調査阻止集会的スライドを上映した。

その後、各班の総括の報告(一〇ページ参照)の後、デモを行った。

朝四時頃、医療センター前のドヤ「福寿園」火災、重軽傷者六名。

ドヤの違法建築の恐ろしさがまたも明白になった。日本福音ルーテル天王寺教会において、越冬委主催、越冬支援中間報告集会在開かれた。参加者は約八十名。内容は、まず始めに横浜のドヤ街寿町の映画「生きる」を上映した。これは、日雇労働者が港湾で働く一日を追い、寿町で生きている数人が自らの足跡を語るといった労働者のありのままの姿を描いた映画。

その後、越冬実からは、老人、病弱者の軽作業場をつくる必要性があるという提議がなされ、炊き出しの会からは、自らの場で釜ヶ崎の問題と取り組んで欲しいという要望が語られた。割と若い人の参加が多く、この集会を通し、今後問題も共有してほしいと思った。

カンパ要請、中間報告ビラ発送始まる。主に東京以南、カトリック、プロテスタントの教会、支援者に約四千通を配布する。

今日で越冬終了。炊き出しも三月以降、一日二食になる。しかし、越冬が終っても釜ヶ崎の状況は変わ

3月6日

らない。冬に問題が緊迫するということはある。今(五月/六月)は、青カンをして凍死する心配は少ない、ということでも少し活気はあるが、仕事がない、という状況は冬と変わらぬ。炊き出しの数は五百と越冬期間を上回る。年間を通しての取り組みの必要性を痛感させられる。

越冬支援総括集会をふるさとの家で行った。シスターの手づくりのからあげ、おにぎりとストロームさんのケーキに舌づつみを打った後、九時半頃まで、主にパトロールについて話し合いがなされた。今回は、あまり外に呼びかけず、三十人程で、活発な討論がなされた。

一月十五日以降のパトロールについては、必要な人に「希望の家」の地図を渡し、翌日、入佐さんがケアするというかたちでパトロールで出会った一人一人との関わりが深められた。この点は、来年も続けてはどうか、ということになった。

また、パトロールで出会う労働者と、回る側としての「わたし」との関係が問題になり、「青カンしている人はこうだ」と決めつけてしまふのは問題がある、パトロール自体、限界があることを認めつつ、その中でお互いに変わっていく、ということを考えていきたいという、参加者からの率直な意見があった。

28日

8日

7日

2月1日

# 「第十二回釜ヶ崎越冬闘争」の目標と課題

労働者自身が組織した「第十二回釜ヶ崎越冬闘争」は、何を目標にし、また何を獲得し、何を課題として残したか。一九八二年一月二十七日、西成市民館で行われた「越冬総括集会」に出された越冬闘争実行委員会の「越冬報告」を紹介する中で考えてみたい（以下は「越冬報告」より抜粋）。

## なぜ一月十五日までか

今回の越冬闘争は「熱い団結で冬地獄を撃て」を合い言葉に、十二月二十五日から一月十五日まで闘われました。期間短縮については、「救済的」な越冬を自己目的化し、長期化するよりも、労働者にとってより本質的な問題である労働課程における闘いを、組織的にもより強固に準備していくことが今最重要なのではないか、その方が労働者の解放闘争に有利に展開されるのではないだろうか、力量不足なこともあり、小さな力量の中でより効果的に力を発揮するため、そうした方がいい。こうした議論の結果、期間短縮が決定されたのです。

## 医療班と争議班に重点を置く

今回の越冬闘争は、昨年九月に結成された全国四大寄せ場（註 東京―山谷、横浜―寿、賤されました。名古屋―笹島、大阪―釜ヶ崎をさす）の交流会で、一定共通の獲得目標が設定され、これにそって闘われました。

① 越冬を通常の闘いの一つとして、寄せ場解放闘争の戦略のもとに位置付け直し、

② 年末年始に煮つまるアブレ（註―失業）―野たれ死（行路病死）攻撃に対し、防衛戦として命を守る闘いと同時に、怒りを資本・行政に向けて組織し、

③ 特に、労働相談を積極的を受け、アブレにつけ込む悪質IIケタオチ業者との争議を取り組むことで、春からの闘いの準備と

釜ヶ崎では、医療班と争議班の活動を主として闘うことが、越冬突として確認され、実行されました。

争議班として三件（註 春日土建闘争―二月三十日、八起建設闘争―一月七日、藤原靖組闘争―一月十二日）の争議が勝利的に闘いとられたことは、今越冬の大きな成果です。これは、七六年以降の停滞した越冬闘争を一步乗り越えたものとして、第一に評価できると思います。労働者が青カン強いられ、「行路病死」の危機にさらされる結果に対処するだけでなく、その根源に向けて撃つべく布陣の第一歩を獲得できた、と言ってもいいでしょう。

## 寄せ場解放闘争の強化

「行路病死」攻撃こそ、釜ヶ崎II寄せ場の支配と搾取の本質を示しています。アブレ―半ダコ（註 タコ部屋まがいの悪質飯場）・暴力飯場―トンコ（註 飯場等から黙って逃げ出す）―青カン―身体衰弱―ケタオチ病院―トンコ―青カン―……。この流れがやがて労働者を「行路病死」に追い込みます。体にガタがくればケタオチ飯場にしか行けなくなり、ケタオチ飯場に入れば虐待され、トンコせざるを得なくなり、労働意欲が失われて青カンが続けば体は増々ガタガタになる。病院に入れば差別されるし、体を治す意欲もうすれ酒でも飲もうものなら、ただちに追い出されて又、青カンに逆もどり。

こうした悪循環を断ち切らない限り、労働者にとって明日はない。この悪循環を断ち切るためには、労働者の生き血を吸って太っている半ダコ・暴力飯場、悪徳病院に対して闘いを組織し、労働者を取りまく状況を変えていかねばなりません。

今越冬闘争をこうした面から考えれば、まだまだトータルな形では取り組めておらず、労働者全体の団結した力を更に拡大し、闘いの大きなウネリを形成していくことが、要求されています。

今越冬闘争の積極面のもう一つとして、支援の人々が前回よりも多かったことがあげられます。今後は支援の人々との通年的な関わりを強化し、寄せ場解放闘争を全労働者階級、人民の課題となるよう強く訴えていくことも

に、寄せ場の側としても、他の諸戦線へ打って出れる体制を強固にしておくことが要請されている、と思います。

## 闘争圧殺をゆるすな

次に克服すべき問題点をあげていきます。

第一に、敵II警察、行政の隔離、分断、封じ込め政策を、今越冬闘争も突破できなかったことがあげられます。第五回越冬闘争の臨泊（註 臨時宿泊所）闘争、公園パレード闘争（註 一九七五年二月、花園公園越冬テント村での闘争）、闘争以降、警察、行政の越冬対策の主要な環は、闘争拠点の封じ込めにあります。具体的には、臨泊の南港埋め立て地への隔離収容、公園封鎖（註 公園を越冬闘争テント村としての使用を許可しない）としてあります。こうした敵の封じ込め、闘争圧殺に対して今越冬も、十分に対応しきれません。敵の戦略方針をいかにくい破っていくのが、今後の課題です。



第二は、一とも関連しますが、行政闘争の取り組みがほぼできなかったことがあげられます。府労働部、市民生局とも窓口を閉ざしており、これをおこし開けるためには、特に自治体労働者との共闘を組織することが課題と



なっています。

第三に、個別争議に参加しても、争議団として持続的に闘争に参加していきける労働者をほとんど組織していきない問題があります。

### 闘いの主体はあくまでも労働者

いかなる闘いにおいてもまず肝心なことは敵と味方を明確に区別して、味方の支持を拡大し、味方を増やして、敵を孤立化させていくことです。あらゆる所で、特に闘争の場

労働者に働きかけ、工作し、味方の隊列として統一して組織していきけるよう努力しなければなりません。このことは同時に、闘いの主体は誰なのかを問い直すことであり、闘争の利益を誰に返していくのかという、思想的問題でもあります。自分(たち)のための闘いに陥る傾向を排し、闘いの主体はあくまでも労働者であることを基点に据えて、労働者の利益を第一とする観点に常に立ちかえる必要

があります。



医療センター前のフトンに寝ざるを得ない労働者の多くは、身も心もボロボロにされ、現象的には「みじめさ」や「だらしなさ」が眼につきまます。酔っているときなど特にそうですし、疲れている時など、怒りが敵に向う前に労働者に向ってしまうことが多々あります。その裏腹には自分が「やってやっていると意識が働いていることは確かです。」

仲間に対してもっと「甘く」対応せよ、と言っているわけではありません。抑圧されればされる程人間性を喪失させられ、そうした人々こそ最も人間性の回復を求めていることを知るべきであるし、他の抑圧されている人々のことを自分のことのように考えられるのが、労働者(プロレタリア)階級の態度と違うから提起したいのです。こうした態度を獲得していくことで口先の連帯ではなく、他民族の抑圧についても考え、闘っていきける方向が可能となると思います。

「味方に対しては限りなく熱い思いを、敵に対しては限りなく厳しく」このことを実践していくことにより、仲間とともに生き、闘うことを喜びとすることをめざしたい、と思います。その中で未来に対する展望が生まれてくるでしょう。(以上)

### 報告・釜ヶ崎の冬と労働者の闘い②

## 「釜ヶ崎炊き出しの会」等の取りくみから

今冬の越冬は、「釜ヶ崎地域合同労働組合」「釜ヶ崎炊き出しの会」「釜ヶ崎結核患者の会」「釜ヶ崎労働者生活協同組合」によっても闘われました。その闘いの様子を「呼びかけ」(一九八一年十二月二日)と一九八二年三月五日行われた第十二回越冬闘争総括報告集資料にみたいと思う。

### 第12回越冬を取りくむにあたって

この一年間、私たちの活動はめまぐるしいものでした。地域に住む日雇労働者が、人間として生き、労働者として働ける権利を獲得するために闘ってきたものです。

日常的には、労働相談、医療相談、炊き出し活動、寄せ屋(廃品回収)等を行い、資金不払い相談は二三八件(一九八〇年十月より一九八一年十月)、金額にして三百二十万余円を「業者」より支払わせ、労働者の手に渡

っております。医療券(診察依頼券)は一五〇枚(一九八一年三月より十月)、炊き出しの数は、九万三千五百八十六食(一九八〇年十二月二十五日より一九八一年十月五日)に達しており、廃品回収は、ダンボール二十六ト

ン、新聞紙十トン、雑誌六トン、アルミートン(一九八一年二月より十月五日)を回収しました。

日常生活を重視しながら、

・1月18日(一九八一年)には、「生きぬくための大行進」を炊き出し公園(萩ノ茶屋中公園)よりあいりん職安まで行い、「職よこせ」「病気の仲間を入院させる」と通称センター通りをデモ行進しました。

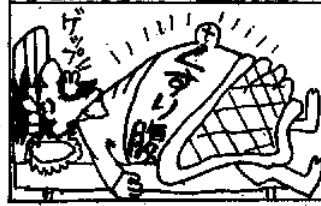
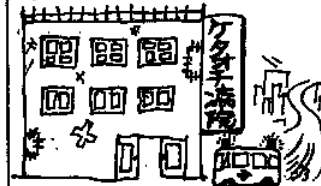
・4月24日 釜ヶ崎地域合同労働組合結成  
・5月1日 メーデーでは地区内をデモ行進  
・5月25日 大阪府に対して「仕事保障の要求」、大阪市には「生活保護の適用」を求め行動をおこしています  
・6月4日 今年に入って二度目の「生きぬくための大行進」を行い、そのまま生活保護

獲得の運動へと発展し、7月18日までに、延べ千四百九十二名が生活保護申請を行い、三百八十名の人が生活保護を獲得しましたが、この闘いでは、山谷や寿町の福祉行政より大阪の方が冷酷であることが立証されたにすぎません。

「山谷や寿町より、釜ヶ崎の方が生活保護の対象者が多いから厳しくない」と……と言っているのは生活保護申請者に対する却下理由になりません。

釜ヶ崎労働者の生活が少しでもよくなる事に、なぜ行政は反対するのでしょうか。また居住証明をドヤ主たちが発行しなくなったため日雇労働被保険者手帳(白手帳)が欲しくても手に入れることができません。そこで、釜ヶ崎解放会館で居住証明の発行を始

# 釜ヶ崎の冬陣



三ヶ月間の医療券発行枚数八百二十五名の一割にあたる八十二名が結核であり、行政当局の結核対策のおくれが浮きぼりにされました。

私たちは越冬期間中、定期的に大阪府下五ヶ所の結核病院（註 阪奈病院、羽曳野病院、島田病院、円生病院、長居病院）を訪問し、病院内の待遇面や治療面のことを詳しく聞いてまわると共に、精神的にも不安である患者さんとお互いの心の交流を深めることにつとめました。快適な療養生活が送れ早く完治し、退院後は福祉行政に対し、居宅保護適用を求めて闘い、結核が再発しない状態で社会復帰が出来るようがんばりました。

## 「労働組合」

労働組合では、昼一時の炊き出し後、仕事

がなく働けない労働者や病気で入院できない労働者が野宿を強いられるため、彼らと共に市立更生相談所におもむき、生活保護の申請をして闘いました。

病院入院・宿泊所入所という生活保護を獲得した人は、この三ヶ月で五百五十九名（宿泊所三八六名・病院一七三名、ただし十二月三十一日より一月四日までの特別受付一六二名は除く、合計すれば七二一名）です。

保護申請する労働者（延べ一、三九五名）に対し、人間扱いをしない市立更生相談所職員。私たち組合員が更生相談所前で待機し、却下されて出て来た労働者を励まし再び申請に行くようアドバイスを続けたことは、私たちと労働者との信頼関係を大きく培ったと確信しています。五百五十九名の保護獲得は大

\* \* \*

越冬闘争後の三月一日から炊き出しは、一日二回昼一時、夜七時萩ノ茶屋中公園で続けられている。不況の波は厳しく、一日で八〇人以上の労働者が列をつくる。結核患者の会は、長居病院の閉鎖にともなう患者追い出しに対して五月一六月にかけ一か月間闘い続け公立病院への入院をかちとった。労組は、労働相談活動を続けている。

めました。相当数の労働者が会館の居住証明書で白手帳を取得しているものと思えます。

・8月22日 参議院議員中山千夏さん、革新自由連合代表の矢崎泰久さんが行政視察を行い、労働者との対話をされました。国会議員が釜ヶ崎に来て労働者と対話したのが初めてなら約一千名の労働者を結集しての大集会も釜ヶ崎始まって以来初めてであったわけです。

・11月3日 第一回釜ヶ崎労働者大運動会

・12月1日より、第十二回釜ヶ崎越冬闘争のとりくみ始まる



「炊き出しの会」

炊き出し 朝・昼・夜の三回に増やす。

医療券発行 市立更生相談所に病人、老人、若者（野宿者）への生活保護適用を要求

労働者の生きぬくための闘いがまたはじまりました。私たちは、来年（一九八二年）二月末日まで越冬闘争を闘いぬきます。

## 三ヶ月の闘いを終えて

私たちは、仕事もない厳寒時、釜ヶ崎日雇労働者が生きてゆくことさえ困難な状態に置かれていたという中で、第十二回越冬闘争を昨年12月1日より今年2月28日までの三ヶ月間、「一人の凍死者も出さぬ」を合言葉に闘いぬいてきました。

炊き出しの会では、仕事もなく働けない高齢者、病気で入院出来ない病弱者、身体障害者たちと共に、仲間を守るため一日三回（朝九時・昼一時・夜七時）の炊き出し活動を行いました。

2月6日付の朝日新聞「声」の欄に釜ヶ崎の実状を訴えた投書が掲載され心ある人々により物資・現金のあたたかいカンパが続々と届けられました。また、炊き出し活動に直接参加し、自らの体験をおして日本の政治の貧困さに驚きと怒りをもち、釜ヶ崎の日雇労働者の立場を理解してくれた支援の人たちも多く、今後、支援の人たちとの連帯を深めるためにも大きな意義があったと思います。

## △資料▽

「釜ヶ崎の冬と労働者の闘い」に引用した資料は次の通りです。

「熱い団結で冬地獄を撃て！」—第十二回釜ヶ崎越冬報告・日刊えっとろ縮冊版（発行・第十二回釜ヶ崎越冬闘争実行委員会、一九八二年五月二十八日刊、頒価六〇〇円）

「第十二回越冬闘争総括報告集會」資料呼びかけ「第十二回越冬を取り組むにあたって」（発行・釜ヶ崎地域合同労働組合、釜ヶ崎結核患者の会、釜ヶ崎炊き出しの会、釜ヶ崎日雇労働者協同組合編）

なお三ヶ月間の炊き出しを利用した労働者数は延べ二万四千九百十三人（朝七、三三七人、昼六、七四六人、夜一〇、八三〇人）。

「結核患者の会」

結核患者の会では、朝九時の炊き出し時に、体の具合の悪い仲間（特に結核）に医療券（診察依頼券）を発行し、医療センター（註 大阪社会医療センター 本田良寛院長）への引率、診察中の待機というように最後まで労働者と共に行動しました。

きな成果だと思えます。

また十二月に入り仕事がなくとも悪質人夫出し業者が横行し、賃金不払い、労災もみ消し、飯場内暴力事件が多発し、被害にあつた仲間が組合に相談にきています。三ヶ月間の相談受付件数は一八二件。主に賃金不払いの相談でした。労働基準法六条違反の中間搾取（ピンハネ）を平然と行い、それを野放しにしている労働行政や元請業者の責任を追求していきました。

以上、三組織の闘いを概略的に述べてみましたが、私たちは越冬闘争だけに限らず、年間を通じて、「人間として生きる権利、労働者として働く権利の確立をめざし、釜ヶ崎の日雇労働者に対するあらゆる差別と闘っていく決意です。」

\* \* \*

# 大阪市の「越冬対策」批判

## 要望書も受け取り拒否

### 西成保健所

今冬も行政には、釜ヶ崎の医療対策をきっちりやっってもらおうと、第十二回釜ヶ崎越冬闘争実行委員会、キリスト教釜ヶ崎越冬委員会等で「要望書」をつくり大阪市環境保健局と西成保健所に出すことにしました。要望書の要点は次の通りです。

一、ご存知の通り、結核は過去の病気として社会的に忘れられた存在になっていきます。がしかし、釜ヶ崎では百人に十一人の割合（第十一回越冬実調査）でいぜんとして高い罹患率を示しています。原因は多々考えられますが、抜本的な対策を立てない限り、この数字は増えることはあっても減少しないと考

えます。  
二、現在大きな社会問題として「精神障害者」に対する差別と強制入院制度の件があります。釜ヶ崎労働者に対する強制収容、隔離は現に存在し見逃す訳にはいきません。

一、三五条（註 結核予防法に言う入所命令）と診断された人が完全入院できる体制を早急につくれ  
一、退院する際、療養必要者に対し、市民生局と連携して居宅保護又は入療を保障せよ  
一、精神衛生法による差別的・便宜的隔離収容をするな——患者の人権を保障せよ

一、同意入院の名による措置入院をやめろ

一九八一年十二月七日、代表がこの要望書を持って市環境局と西成保健所を訪ねました。環境局は責任者がいないので受け取るが、内容については返答できないとのことでした。ところが、西成保健所の方は、係長と係員が応待しましたが、最後まで要望書の受け取りさえ拒否しました。受け付けの机の上に勝手に置いていけば、こんな書類がありましたよと課長に渡すかもしれないと言っています。それも三〇分ほど立話しと押問答の末です。怒りというよりなげなく思いました。

釜ヶ崎労働者が、結核予防法と精神衛生法に基づく当然の要望をしたのに、それすら認めないのが、大阪市の釜ヶ崎労働者に対する態度です。環境局も要望書に対する話し合いは電話で断って来ました。一九八〇年十二月には、話し合いの場をもうけたのですが、信じ難い事象です。しかし、こんな無責任な保健行政がまかり通ってもいま一歩踏み込めないもどかしさがあります。これは大阪市の釜ヶ崎の労働者を一人の人間と認めていない証拠でなくて何でありましょう。

## 保護申請の三分の二は却下

### 市更相

ある意味で釜ヶ崎の労働者の生殺与奪の権を握っているのが、大阪市立更生相談所（以下市更相と略す）です。

大阪市には、二十六区ありそれぞれに福祉事務所があり区民（市民）の生活相談に応じています。西成区にも西成福祉事務所がありますが、市条会とかの適用によって釜ヶ崎の労働者の生活相談にはのりません。わざわざ電車賃をかけて出掛けて行っても、「市更相に行きなさい」と追いかえされます。気の弱い労働者だと再度、相談に行く気力さえ失ってしまいます。

市更相は、釜ヶ崎の労働者のためにのみ設立された第二十七番目の福祉事務所です。一見、行政の親切だと思いたくもありませんが、現実には正反対です。市民一般と釜ヶ崎労働者とを分断しているのです。この市更相は、また、労働者にもいたって不評です。

労働者が十人集まって市更相の話をすると、「市更相に相談に行ってもよかった」という労働者の言葉を聞くことはまずありません。十人が十人、異口同音に「もう二度とあんな所

へ行くか」と言い切りま

市更相は、愛隣会館ビルの二階にあります。玄関の横にはテレビカメラが設置されています。当然、出入りする人をチェックできます。さらに、越冬期間中は、私服警察官が玄関わきに立っています。これが、福祉行政の実態です。

相談室は個室になっていて内から鍵がかかります。一緒に付き添いで行っても絶対に付き添い人は、相談室に入れません。労働者が市の職員からドナルドのを唯だ待合室で聞かなければなりません。しかも、そのドナリ

方は通常ではありません。特に「一番の相談室」はひどいという評判です。

ここに越冬期間中に生活保護法に基づく相談（特に医療扶助—入院治療しかも結核等）に行った労働者に対する「語録」がありますので記します（越冬新聞第十三号）。

「高血圧ぐらい大丈夫、自分でやれ」  
「妹と話し合え」  
「目の悪いのは今にはじまったことではないだろう、自分でしろ」

「退院してから相談に来るのがおそい」  
その結果、相談（申請）に行った三分の二は、申請を却下されています。特に「行革」が言われ出すとそれを盾に市更相の窓口は厳しくなってきました。



# シノギ退治とポスター

西成警察

「スクラムを組んでシノギを追放しよう」  
こんなポスターが年末の釜ヶ崎の街角にみ  
られました。ポスターの主は、西成警察署と  
あいりんクリーン作戦推進協議会でした。  
シノギとは、路上強盗のことです。とくに  
長期の出張（飯場）から帰って来た労働者が  
ほっとして一杯気味で歩いているとききなり  
後ろからなぐられて、現金や時計などを盗ら  
れてしまうのです。不況になると例年にもま  
してシノギが多くなります。

何んとかよい正月を迎えたいと飯場から帰  
って来た労働者がシノギに逢ったときはほん  
とくに悲劇です。ケガはするしお金はない。  
夢に描いた正月はそれこそふっとんでしま  
います。夜間パトロールをしているときシノギ  
にやられた何人かの労働者に出会いました。  
ケガが軽いのがせめてものなぐさめですが、  
シノギがつかまったらという話は聞きません  
でした。むしろ、警察に被害届を出したが、  
反対に「酔っていたんではね」とあまり取  
り合ってくれなかったとボヤク労働者に会  
いました。

ポスターや看板等でシノギがなくなるこ  
とはまずありませんが、ポスター作戦は行政の  
ポーズです。かりに労働者が、シノギをつ  
かまえてやり合おうと、後で暴力行為というこ  
とで警察につかまるといふ矛盾さえ起るの  
です。

でも今冬は、ポスターの効果は夜間医療パ  
トロールの中で変わったことがありました。パ  
トロール中にシノギにやられた人を発見し、  
救急車を呼んだときのことです。救急隊員が、  
親切に状況を聞き、救急車で運んでくれたこ  
とです。これは、昨年まで経験しなかったこ  
とです。しかし、シノギにやられてからい  
くら親切にされても後の祭りです。シノギをど  
うすればなくすることが出来るのか。シノギ  
の原因はどこにあるのかを追究しない限り、  
いくら親切な救急隊員がいても問題は解決し  
ません。不況とシノギ。これはどうも切つて  
も切れない縁のように思われます。

# 福寿園の火事

二月一日、早朝、釜ヶ崎で火事がありま  
した。場所は、大阪社会医療センター前  
です。例年、越冬期間中は、臨時の仮眠のた  
めにふとんをしいている場所のまん前です  
た。その日の夕刊各紙はこんな見出しでニ  
ュースを報じました。

●愛隣で簡易ホテル全焼―直前ボヤ報知機  
切る―二人不明六人けが―宿泊客火だ  
るま脱出―窓格子にすがり絶叫  
(読売新聞二月一日夕)

●西成で簡易ホテル全焼―猛煙、六人重  
傷 逃げ惑い飛び降り客も  
(毎日新聞二月一日夕)

●早朝 簡易ホテル街で大火 宿泊客ら六  
人重傷 五十二人着のみ着のまま脱出―  
あっという間に地獄―窓突き破り路上へ  
(サンケイ二月一日夕)

●また違法建築の恐怖―西成のホテル火災  
「カイコ棚式」放置 間一髪飛び降り―  
窓には格子、迫る炎―違法建築あとを絶  
たす (朝日新聞二月一日夕)

これらの記事が物語るように釜ヶ崎では  
一寸したボヤもすぐ大火になり、しかもけ  
が人が出るのです。その原因は、言うま  
もなく違法建築にあります。ここにも人権  
無視の行政がまかり通っています。

# 機動隊と有刺鉄線に囲まれて

臨時宿泊所

大阪市は例年、「越冬対策」と銘うって大  
阪市のはずれ南港の埋め立て地に釜ヶ崎労働  
者の臨時宿泊所を仮設します。これも最初は  
労働者の要求の中で実現したのですが、近  
頃は、行政（市民生局）の手で一方向的に行わ  
れています。期間は、十二月二十九日から翌  
年一月十日朝までです。市更相が受付窓口で  
すが、受け付けの二十九日・三十日は附近に機  
動隊が配置され、私服警官がトランシーバー  
をもってうろうろしています。民生とか福祉  
ではなく、治安対策としての「越冬対策」の  
一面がよく物語られています。入所できた労  
働者は、南港プレハブ臨泊仮設棟に千五百八  
十二人、その他四百三十二人、計二千十三人  
です。厳しい面接の末、入所できた中の様子  
は次の通りです。

ソ汁はインスタント、洗濯機が五十台、フロ  
が五ヶ所、タバコは若葉が一日二箱、外出時  
間は朝八時から夜九時まで自由になっている  
そうだ（「日刊えっとう」一九八一年十二  
月三十日第六号より）

しかし、一見よさそうに見えますが、出入  
口は機動隊とガードマンに守られ、また仮設  
棟の周囲は有刺鉄線がはりめぐらされていま  
す。外との交流は決して自由ではありません。  
しかも入所時には、不満があっても「団体  
交渉などいたしません」という誓約書まで書  
かされています。さらに、入所条件は厳しく、  
最も入所を必要とされる病弱、高齢者が入所

できず、外で青カンせざるをえませんが、ちな  
みに、青カンの数は、臨泊開設中もへりませ  
んでした。

一九八一年十二月三十日	二六八八人
三十一日	二二八八人
一九八二年一月一日	二六三三人

誰のための臨時宿泊施設だったのでしょうか。  
二千人人所できたと見え、さらに二―三  
百人の労働者は、厳冬の夜をコンクリートの  
上ですごさねばなりません。これはま  
た青カン―行路病死へとつながっていきま  
す。西成福祉事務所の統計によれば、

一九七九年度行路病死	二五〇人
一九八〇年度行路病死	二三五人

行政の実態

「面接で入所が決まると下着上下と石けん  
タオルが支給された。臨泊は十六棟の二階建  
てプレハブからなっている。内部は二段ベ  
ットが三列に並べられていて、一部屋に百人が  
寝るようになっていた。テレビは四台  
(上下各二台ずつ)、飯は折りづめ弁当で



# 午前一時の釜ヶ崎

## 青カンを強いられた労働者たち

「一人の死者もだすな！」

越冬のたたかいは、「死」とのたたかいである。道端で多くの人が死んでゆく。釜ヶ崎をもつ西成区役所の集計によれば次のようである。

七九年度 二五〇名（内行路死七六名、行路病院死二五〇名）

八〇年度 二三五名（内行路死五一一名、行路病院死一八四名）

アジアのスラムを訪問した日本人が、「あの状況は日本では考えられない」と感想を語るのをよく聞く。しかし、その同じアジアのスラムで活動している友人たちが日本を訪ね、釜ヶ崎に足を運んだとき、興味深い態度を示すことがある。日本に来て、あまりの「発展」の格差にだまりこんでいた彼らが、釜ヶ崎に来て「アット・ホーム」な気分になり、リラクセスしはじめることが多い。そし

て地域を廻るうちに、今度はしだいに重苦しい気分になりはじめ、「自分たちのスラムより状況が重い」と話しはじめるのである。さまざまな事情によって家族から別離を強いられている人、病気になる、誰にもとられることもなく道端で死んでいる人びとがいる状況が、ここ釜ヶ崎にはある。そしてこの状況がまだまだ日本人びとに知られていない。

「一人の死者もだすな！」のスローガンのもとに、越冬のたたかいはシンボルでもある夜間医療パトロールが、ちょうどクリスマス夜の夜にスタートする。それは、釜ヶ崎労働者の自立のたたかひでもある。景気の変動に最も敏感に対応させられる日雇いという身分。常勤サラリーマンの安全弁として、不景気になればたちまちそのシワ寄せを担われる不安定さ。そのなかで自分たちの生きる権利を獲得するためのたたかひが、とくに厳しい状況にある（気候の点

からも、仕事がなくなくなる年末年始という点からも）冬にくりひろげられる。

たたかいは、労働行政を司る当局にむけられ、自分たちの労働力をむさばり搾取してやまない悪徳業者にむけられ、そして同時に連帯してたたかうべき労働者自身や市民にもきびしくむけられる。

パトロールは、このたたかひを共に担うという連帯のシンボルでもある。釜ヶ崎の労働者が自らの自立のために、より弱い者を互いにかえりみるために、夜間のパトロールを行う。釜ヶ崎に足を運び、出会いを与えられた者が、市民としての自らのありようを問いつつ、支援者としてパトロールに参加し、労働者と共に生きることを模索しはじめる。

パトロールをしたからといって、山積する問題の解決が続々となされていくというものではない。まさにスタートなのである。共にパトロールすることによって、「死」におい

こまれている状況、「死」においやっている状況を見つめ、その状況を変えてゆくことへのたたかひのスタートなのである。

第一期（12月25日～1月15日）

釜ヶ崎日雇労働組合を中心に第十二回越冬闘争実行委員会が組織され、釜ヶ崎以外の労働者や市民が支援者として参加、キリスト教越冬委員会も例年通りパトロールの一翼を担うこととなった。

午後十時半から約一時間半をかけて、釜ヶ崎地域内を数グループに分れて巡回する。

「一人の死者もだすな」のスローガンの具体化として、医療に重点をおいたパトロールになる。「青カン」（野宿）せざるを得ない人びとを訪ね、身体の具合をたずねる。急を要する場合は救急車をとり病院に運んでもらう。この場合、翌日、入院の有無を調べ、入院の場合は病院訪問をはじめ、病院の都合でタイリ廻しのあけく、元の「青カン」に戻されたという例もしばしばみられる。

急を要さない場合は、簡単な手当と医療相談を行う。地域内にある大阪社会医療センターに翌日同行して診察を受けたり、市立更生相談所を通じて病院への入院手続きをとるな

どの働きが、このパトロールに続く仕事として重要なのである。10が結核患者であるといわれ、殆んどの人が内臓疾患をもち、危険な仕事ゆえに労災にあふ比率も高い。従って、医療活動としてのパトロールの持つ意味はきわめて高いのである。

何らかの理由で「青カン」を強いられてしまふ。この寒空で、好んでやる者は誰もいない。仕事がなくお金がない、かせぎを「シノギ」（西成路上強盗）にまきあげられてしまった、病気で仕事ができない……等々の理由が考えられる。この野宿を強いられた人びとのために、大阪社会医療センターの好意で、その軒先にフトンを敷きつめる。わずかに雨をしのげる軒下であるが、吹きさらしであることに変わりはない。カンパで寄せられたフトンに身を寄せ合せて、多いときは二百人を越え、す人びとが一夜をすごす。フトンで少しでも暖をとって、明日の仕事を求めるたたかひの夜である。

さらに、「警備」を用意する。先述の「シノギ屋」が、覆っている労働者のなげなしの持ち物を執拗にねらう。軒下のフトンで寝ている間、数名の「警備係」が不寝番をつとめる。

年末年始——福祉の切り捨てをみる

十二月二十五日、パトロールの初日、「青カン」数は百九十七名を記録している。

カンパのフトンを百二十名分用意したのだが、初日からこの様子では先が思いやられる。早速、フトン・カンパの要請を各教会などにお願した。

大阪市は、毎年、釜ヶ崎労働者のための越冬対策として、臨時宿泊所を用意している。年末の二十九日から開始され、第一日目で約千二百名の人びとが入所したそうである。

「青カン」は、二十八日に三百八十一名を記録、二十九日には二百六十八名と臨時宿泊所が開設されているにもかかわらず、百名程度しか減少していない。別名「収容所」と呼ばれ、大阪南港の埋め立て地に建てられた簡易宿泊所は、なんとも寒々としている。生活条件がきびしく、楽しかるべき年末年始をそこで過ごすには耐えられないと、一度入所しても出てくる人が以外と多いのに気づかされる。

それに、昨今の「福祉切り捨て」の影響がひしひしと感じられた。臨時宿泊所以外の大阪市の委託を受けた施設から、正月早々出る

ことを余儀なくされた人びとに出会った。聞けば、予算の切りつめの波がここに押し寄せているという。「福祉元年」とかい言葉が聞かされたのは、ついこの前ではなかったのだろうか。最も弱い立場の人から切りつめの影響を受けていく「福祉」とは何だろう、としみじみ考えさせられる。このありさまが、釜ヶ崎では、実に明瞭にみえてくるのである。

第二期(1月16日〜2月28日)

第一期が十五日で終ることについて、私たちキリスト教越冬委員会で、さまざまな検討がなされた。

当然のことながら、寒さは依然として厳しい。昨年のパトロールが一月末で終了した後、二月の死者がかなり多かったのである。せめて私たちだけでもパトロールが続けられないかと話しあった。

パトロールは、地域を巡回すればそれでよいのではない。巡回することによって、さまざまな課題が生じてくる。はたしてフトンが敷けるかどうか。たとえフトン敷きをどこに保護したとして、先述の「警備」をどうするか。キリスト教関係だけでどれだけの人敷を動員できるか、等々。話しあってきた結果、次の結論に達した。

- (一) 十六日以降二月末までとにかく続けること。
- (二) 時間は深夜一時から行う。これは地域内の「ドヤ」、呑み屋などの閉店後になり、この時間に屋外にいる人は、まず間違いなく「青カン」と考えられるからである。
- (三) 医療センター前でフトン敷きは不可能であるため、とにかく一夜をしのげる防寒着とインスタント・カイロを手渡すこと。
- (四) 身体が弱っている人には、希望の家を示したカードを渡し、翌日医療相談にくるよう話すこと。その相談に備えて、入佐さんはパトロールに参加せず、希望の家で待機する。
- (五) パトロール参加者が三人以下のときは中止する。これは「シノギ屋」とのトラブルが予想されたためである。

以上、いくつかの限界をもちながらも、とにかくやってみようかと決断した。私たちがパトロールを継続することによって、「炊き出し」や「労働争議」(賞金不払いの悪徳業者に對して)等を継続している釜ヶ崎労働者との連帯ができ、さらに、越冬のたたかいが拡がりをもちうると考えたためであった。

したがってこの七四・五という数字は、

「青カン」せざるをえない人の数字にかなり近いといえるのではなからうか。越冬期間中にいつも話題になることなのだが、「フトンがあることへの甘えがある」という意見である。たとえ「青カン」であるにせよ、フトンが用意されているから安易に所持金をバクチや酒に使ってしまったという労働者もいたようではある。昨年一月末に行われた面接調査でも、その点は指摘されていたように思う。

したがって、「病人は病院へ、働ける人はドヤへ」ということを徹底させる意味で、昨年のパトロールは一月末で打ち切られたという経緯もあった。それを考慮した上で、この七四・五人という数字は、やはり私たちに重

なり役にたった。相談にくるよう口でいうだけではなく、図で相談場所と時間などを示したことによって、かなりの人びとがそれをたよりに希望の家を訪ねている。また、パトロールをした者が話しあった相手の名前、居場所、病状などを記録して、翌日入佐さんがその場所を訪ね、その結果をさらに記録するという方法もとってみた。このことから、その人が入院してからも、かなり個人的に交わりを深めることが、以前にもまして可能になってきたという結果があらわれていたように思われる。

いる。「隣人を愛する」ことを、まさに「隣人」との出会いのなかで求めることになる。次に、この出会いを体験した私たちが、どう変えられてゆくことであろうか。「釜ヶ崎を見る」つもりで足を踏み入れた者が、逆に「釜ヶ崎から見られる」ことになる。釜ヶ崎をとりまき、釜ヶ崎を創りあげている市民社会がある。その一人である私がどう生きようとするのか、どう釜ヶ崎を創りだしている状況を変えようとするのか、問われることになる。

パトロールを続けてゆくなかで、単に毎日

入れ変りたち変り担当者が巡ってゆくということにとどまらず、定着している「青カン」の動向を把握し、カルテのようなものを作製して、訪ねる者と訪ねられる者両者により親密な関係がでないだろうかと考えはじめていた。可能なかぎり話しあえる人とは、その度合いを深めていくように努力したのである。そのためには、用意していたカードが

パトロールから

二月末までパトロールは続けられ終了した。さて、私たちにどうしてパトロールとは何だったのだろうか。まず、出合いの場と考えられる。何年かの経験を持った人もいるし、初めて釜ヶ崎に接する人たちがいる。そして、何らかの出会いを体験させられる。はじめに紹介したアジアの友人の言葉同様、「日本にこの状況が……と多くの参加者がいう。一つの「ディスカバー・ジャパン」である。キリスト者にと

最後に、パトロールは、釜ヶ崎にあって釜ヶ崎を変えてゆくこととして活動にどう関わってゆくのであろうか。「一人の死者もださない」ために、「青カン」を一人でも減らすことではなからうか。「青カン」を強いられている人が、病いを癒され、自らやりたい仕事につけるようになり、「青カン」しなく

釜ヶ崎の「冬」は厳しい。今なお炊き出しに行列が続いている。むしろ増えている。「春」を求める動きと動き人が求められていることを知らされたパトロールであった。